80. Love
TOKYO FM

PRESS RELEASE

報道各位　　2011年４月１日

2011年 TOKYO FM 全社会議社長挨拶

～2011年4月１日（金）午後5時 TOKYO FMホール～

＜代表取締役社長 冨木田 道臣 挨拶＞

会議に先立ちまして、被災者の皆様に心からのお悔やみとお見舞いを申し上げます。

本日より新たな期がスタート致しました。皆さんには二つのお礼を申し述べたいと思います。一つは、理念にもとづいた災害対応の特番制作について、もう一つは、皆さんの下期の頑張りについてであります。

東日本一帯を未曾有の大地震が襲い、大津波、更には原発事故も加わって、想像を絶する被害をもたらしています。非常に多くの人命が失われ、原発の危機は未だに去っておらず、敗戦に次ぐ国難の時であります。日本経済への計り知れない打撃、それも長期にわたることは必定であります。

当社は地震発生直後から 1 週間にわたり全面的に報道特別番組を編成しましたが、放送人として実に素晴らしい仕事をしてくれました。本当にありがとう。

メディアとしての公共的役割を果たすと共に、当社の行動指針である「ヒューマン･コンシャス～命を愛し、つながる心」をコンセプトに、被災者の目線で、被災者を勇気付けると共に、心のケアにも気を配り、「感動を提供し共感を得る」という当社の理念に基づく放送を実現してくれました。「ハートにも頭にも響く番組だった。今まで聴いた中で１番良いラジオだった」というツイッターに代表されるように、皆さんが届けるコンテンツは共感され、絶賛の反響が寄せられ続けています。ラジオメディアのプレゼンスを大いに上げ、メディア復権への兆しを創ってくれました。

私は今年の年賀式で「メディアの復権を図るためには、顧客満足度を得るコンテンツに徹底的に拘ることしかない」と申しました。今回の報道特番は、被災者の気持ちを十二分に汲み取り、被災地以外の方々の思いにも配慮し、音楽界からの励ましのメッセージをはじめ、情報の伝え方に拘り、選曲も、歌詞や曲調を真剣に吟味し、FM メディアならではの番組を作られました。まさにリスナー第一主義の実践であったわけです。

コンテンツに拘るには、「高い志をもち、最高のものを追求するという強い意思」と、「常に本質を忘れず、毎日原点に還り、自分を素直に見直せる謙虚さ」を併せ持つという「プロ意識」が必要で

す。皆さんが送り手発想から脱却し今回肌で感じ取ったリスナー第一主義の実体験は、大きなきっかけとなって今後のコンテンツの追求に必ず生きてくるでしょう。

収益部門では放送現場と一緒になって、放送を支える営業対応はもちろんのこと、被災地ネットワーク局支援をはじめ様々な問題解決に奮闘してくれています。マルチメディアならびに管理部門では、被災地の岩手、仙台、福島の 3 局に対して、食料や水、また軽油等、救援物資を調達し、現地へ送り届けるなど、心からの支援に取り組んでくれました。

このように一人一人がやるべき責務をやり通すという使命感のもと、全社が一枚岩になり、価値観を共有する軍団として行動してくれたことを最も嬉しく思いますと共に、一人一人の社員を誇りに思います。

そして、もう一つのお礼は、この下期の収益部門の頑張りです。非常に素晴らしいものがありました。期初の大変厳しい状況から徐々に巻き返し、営業利益において上期予算は大幅に下回ったものの、下期予算は、震災前までは、達成を確実に見通せる勢いにまで回復させてくれました。営業局の企画提案能力が目覚しく向上している事が実感できる下期でありました。本当にありがとう。

一方で、この震災により、前期決算は大きな打撃を受けると共に、これから始まる新年度も未だかつてない困難な状況が予測されますが、国難という状況下であればこそ、覚悟をもって立ち向かおうではありませんか。まさしく今期のテーマは「脱却と創造」であります。過去の自分からの脱却、従来の慣習や考え方からの脱却、そして震災被害からの脱却です。一人一人が本来持っている高い能力を覚醒させて、新たなる創造へとエネルギーを集約・連携させてこそこの難局から「脱却」できるのです。大切なことは、この度の誇り高い経験を活かし、通常放送を謙虚になって見直し、新たな「創造」へ向かうことであります。

マルチメディア放送へチャレンジするためにも、今までの延長線上ではなく、いったんゼロリセットして新たに創り出すという覚悟と心意気が必要です。生活者が求めるサービスを考え出し、「ディマンド・プル」型の発想に徹しなければなりません。皆さんが非常時対応で示してくれた心からの思いやりと心意気を大切に、「脱却と創造」へ邁進して行きましょう。

簡単ですが感謝をもって期初の挨拶とさせていただきます。今期も宜しくお願い致します。